マスコミの現場から

学んで治そう

北海道新聞社編集局生活部
小塚由記夫

1964年12月17日　神奈川県生まれ
1990年　北海道新聞社入社
現在は編集局生活部で医療を担当

「50年ぶりで眼鏡なしで部屋の中を歩けるようになりました。眼鏡をかけると視力は1.2までになりました。本当にうれしい話です」

昨年のクリスマス、読者からこんなお手紙をいただいた。60歳代のこの女性は、夫が白内障と緑内障のため視力が低下していることを心配し、北海道新聞生活面の「健康」欄に毎週水曜日に掲載している医療相談コーナー「学んで治そう」に質問を投稿。10月の紙面に載った記事を参考に夫が眼科を受診し、12月に両目の手術を受けたという。幸い手術は大成功で、視力もかなり回復したことが文面には記されていた。

「学んで治そう」には読者から毎月数十通の質問が届く。ファクスや電子メールもあるが、多くは手書きのはがきや封書だ。検査結果を詳細に記載していたり、処方箋を同封するなど詳しい内容のものもある。がんや心臓病、糖尿病などの生活習慣病から睡眠障害や子どもの発達、あまり病名を聞いたことのない難病まで内容は多岐にわたるが、特に目立つのは腰痛や関節痛といった整形外科分野や皮膚病、「口が渇く」「尿漏れがする」など、どちらかといえば「日常的」な病状だろうか。ただ、どんな疾患であろうと、文面からは病気への不安や痛みから早く解放されたいという読者の切実な思いが伝わってくる。

質問は現在も通院中だったり、過去に受診しているケースがほとんどだ。医師の診察や検査を受けているのだから、本来ならわざわざ質問をしなくてもよさそうなものだが、質問は後を絶たない。セカンドオピニオンを求めているとの見方もあるだろうが、背景には医師と患者との間のコミュニケーション不足があるのではないだろうか。

典型的な質問に「手術を勧められたが、どうすればよいでしょうか」というものがある。医師から治療法や手術のメリット、デメリットなどについて十分な説明を受けていれば、こうした質問は減ってもおかしくない。一方で患者側にも、自分の病気や治療法について医師に十分な説明を求められない「空気」みたいなものがあるように感じる。

質問を寄せる読者は高齢者が多い。医師の前では萎縮してしまったり、説明を求めたくても意思表示できない患者も多いのではないだろうか。中には医師から「加齢のせい」といわれたが、何かいい治療法はないかといった質問もある。特に読者からの手紙を読んでいると、年を取るほど自分の健康を気にかけ、不安や悩みは尽きないという印象を受ける。

１年ほど前、空知管内奈井江町の90歳近くなる独り暮らしの女性から聞いた忘れられない一言がある。その女性は甘いものが大好きだが「糖尿病になるので今まで控えてきた」と言うのだ。その時、人間はどんなに年を取っても健康でいたいと願い続けていることを実感した。だからこそ医師という仕事が激務であることを理解した上で、これまで以上に医師と患者が十分意思疎通し、患者の気持ちを医師がくみとれるようコミュニケーションを図っていくことが必要ではないだろうか。

生活部では「学んで治そう」に寄せられる多くの質問から読者の関心が高そうな内容のものを選び、できるだけ分野が偏らないように毎週テーマを調整して専門医に回答を依頼している。１月上旬までに掲載した最近のテーマは「甲状腺の腫れ」「月経前不快気分障害」「胆嚢腺筋腫症」「水疱生天疱瘡」「アキレス腱石灰化症」など。取り上げるテーマや内容によっては問い合わせや疑問などが寄せられることもあるが、冒頭で紹介したように読者からうれしいお便りをいただくこともある。

「学んで治そう」に寄せられる質問の数を見ても、医療や健康への関心の高さがうかがえる。今後も紙面を通じて読者が病気について学び、治療に役立てられようなコーナーを目指し、読者と医療との間をつなぐコミュニケーションの一つとして「学んで治そう」を充実させていきたいと考えている。